

『龍谿王先生全集』 卷一三 訳注 (六)

二松学舎大学宋明資料輪読会王龍溪班

山路 裕

【凡例】

- 一 本訳注は、王畿『龍谿王先生全集』巻十三（序類）の訳注である。参加者は田中正樹（陽明学研究センター長）・山路裕（二松学舎大学院博士後期課程単位取得満期退学）・陳鵬飛（二松学舎大学院博士後期課程）である。
- 二 底本には万曆十六年蕭良幹刊『龍谿王先生全集』二十卷（四庫全書存目叢書所収）を用いる。校勘には、万曆四十七年丁賓刊『龍谿王先生全集』二十二卷（国立公文書館所蔵）を用い、注記の際は「重刊丁賓本」の略称を用いた。
- 三 本稿の構成は【原文】【校勘】【訓読訳】【現代語訳】【語釈】の順に構成される。なお、必要があつて補説や資料を加える際には、【語釈】のあとに加えることにした。
- 四 文意や理解を助けるために訳者が補った言葉は（ ）で示した。

「歐陽南野文選序」

【原文】

予友歐陽南野子文集行於世久矣。門人督學少洲馮君慮其浩博、授集於予。選其尤有關於學者若干篇、屬會稽陽山莊尹、

將粹以傳。而門人宗伯石麓李君亦以所選集寄至，遂參互校輯，共得文若干篇，釐為四卷云。

序曰：通天地萬物一氣耳。良知、氣之靈也。生天生地生萬物，而靈氣無乎不貫，是謂生生之易，此千聖之學脈也。我陽明先師慨世儒相沿之弊，首揭斯旨以教天下，將溯濂洛以達於鄒魯，蓋深知學脈之有在於是也。海內同志之士，見而知之與聞而知之者，莫不知有致良知之說。然能卓然自信，實致其知者有幾。能超然自悟於言教之外者有幾。

良知本無知。凡可以知知，可以識識，是知識之知而非良知也。良知本無不知。凡待聞而擇之從之、待見而識之，是聞見之知而非良知也。是皆不能自信其良知，疑其不足以盡天下之變，而有所待於外也。道本自然，聖人立教，皆助道法耳。良知亦法也。果能自悟，不滯於法，知即良知之知，識即良知之識，聞見即良知之聞見，原未嘗有內外之可分也。

南野子蚤歲即從先師於虔，所謂見而知之者也。沉粹慧敏，才足以達素為先師所授記。凡振闢淬鍊，蓋無所不至，而其顯體默究孳孳疊疊，以繼其志，亦無所不用其情。予不肖辱交於南野子三十餘年，受其切劘之益最深。師門晚年宗說，每舉相證，未嘗不爽然稱快，以為聞所未聞。若飲醇醴，盎然且溢於面。所謂交相益者非耶。

先師嘗謂「獨知無有不良」。南野子每與同志論學，多詳於獨知之說。好好色惡惡臭，乃其應感之真機，戒自欺以求自慊，即所以為慎獨也，集中無非斯義。所謂卓然之信，超然之悟，蓋庶幾焉。

儒臣得君，自古為難。昔者河汾之學，不行於身而見貞觀之朝，蓋房·杜·王·魏諸賢為之表章，有以致之也。先師之學，不啻河汾。南野子身際明聖，宣昭禮樂之化，過於房·杜諸賢。即其所履，益信儒者有用之學，於師門與有光焉。惜乎，天不憖遺，使大業不得終顯於世。吾黨不能無遺恨耳。讀是集者，知所考鏡，以信以悟，反求而自得之，發明此學於無窮，其機有不容自己者矣。

【校勘】

異同なし。

なお、本序文はもともと『歐陽南野先生文集』四巻本のために草された序文（以下、原序）である。本序文と原序とを比べると内容に大きな違いが見受けられる。そこで、ここでは内容の理解に関わる範囲に限り原序と対校して示し、原序の全文は【参考資料】として後掲する。本訳注が利用した四巻本『文集』は、『四庫全書存目叢書』集部第八十一冊所収、中国社会科学院文学研究所藏嘉靖刻本である。

- ・為四巻云序曰 原序では「為四巻而屬余序之曰」に作る。
- ・才足以達素為先師所授記 原序では「才足以達先師素所授記」に作る。

【訓読】

予の友 歐陽南野子の文集 世に行なはるるや久し。門人の督學 少洲馮君 其の浩博なるを慮り、集を予に授く。其の尤も學に關はり有る者若干篇を選び、會稽の陽山莊尹に屬し、將に梓して以て傳へんとす。而して門人の宗伯 石麓李君も亦た選ぶ所の集を以て寄至し、遂に參互校輯するに、共に文若干篇を得れば、釐めて四巻と為すと云ふ。

序して曰く、天地萬物に通ずるは一氣のみ。良知は、氣の靈なり。天を生じ地を生じ萬物を生じて、靈氣は貫かざるは無し、是れ生生の易と謂ひて、此れ千聖の學脈なり。我が陽明先師 世儒相ひ治ふの弊を慨き、首めに斯の旨を掲げて以て天下を教へ、將に濂洛に溯りて以て鄒魯に達せんとするは、蓋し深く學脈の是こゝに在る有ることを知るなり。海内の同

志の士、見て之れを知ると聞きて之れを知る者とは、致良知の説有ることを知らざるもの莫し。然れども能く卓然として自ら信じて、實に其の知を致す者幾か有る。能く超然として自ら言教の外に悟る者幾か有る。

良知は本と知ること無し。凡そ知を以て知る可く、識を以て識る可きは、是れ知識の知にして良知に非ざるなり。良知は本と知らざること無し。凡そ聞くを待ちて之れを擇び之れに従ひ、見るを待ちて之れを識るは、是れ聞見の知にして良知に非ざるなり。是れ皆な自ら其の良知を信する能はず、其の以て天下の變を盡くすに足らざるを疑ひて、外に待つ所有るなり。道は本と自然にして、聖人の教へを立つるは、皆な道を助くるの法なるのみ。良知も亦た法なり。果たして能く自ら悟りて、法に滯らざれば、知は即ち良知の知、識は即ち良知の識、聞見は即ち良知の聞見にして、原と未だ嘗て内外の分かつ可きもの有らざるなり。

南野子蚤威に即ち先師に虔こたへに従ふ、所謂ゆる見て之れを知る者なり。沉醉慧敏にして、才は以て素もととより先師の記を授くる所と為るに達するに足る。凡そ振厲淬鍊すること、蓋し至らざる所無く、其の顯體默究すること孳孳疊疊として、以て其の志を繼ぐも、亦た其の情を用ひざる所無し。予不肖なるも交りを南野子に辱くすること三十餘年、其の切勵の益を受くること最も深し。師門晩年の宗説は、擧げて相ひ證する毎に、未だ嘗て爽然として快を稱し、以て未だ聞かざる所を聞くと為さずんばあらず。醇醴を飲むが若く、盎然として且に面に溢れんとす。所謂ゆる交り相ひ益する者なるか非なるか。

先師嘗て「獨知は不良有ること無し」と謂ふ。南野子同志と學を論ずる毎に、獨知の説を詳らかにすること多し。好色を好み惡臭を惡むは、乃ち其の應感の真機、自ら欺くを戒めて以て自ら慊こたへからんことを求むるは、即ち慎獨と為す所以にして、集中斯の義に非ざるは無し。所謂ゆる卓然たるの信、超然たるの悟にして、蓋し焉れに庶幾からん。

儒臣 君を得るは、古より難しと為す。昔者^{むかし} 河汾の學、身に行なはれざるに而も貞觀の朝を見るは、蓋し房・杜・王・魏の諸賢之れが表章を為して、以て之れを致すこと有ればなり。先師の學は、啻に河汾のみならず。南野子身は明聖に際して、禮樂の化を宣昭して、房・杜らの諸賢に過ぐ。其の履む所に即けば、益ます儒者有用の學を信じ、師門に於いて光有るに與る。惜しいかな、天^{しほ} 慙^{しほ}くは遺さず、大業をして終に世に顯らかにするを得ざらしむること。吾が黨遺恨無きこと能はざるのみ。是の集を讀む者、考鏡する所を知りて、以て信じ以て悟り、反求して自ら之れを得ば、此の學を無窮に發明し、其の機自ら己むを容れざる者有り。

【現代語訳】

私の友人である歐陽南野さんの文集が世間に流布して久しい。(歐陽南野の) 門人で督学の馮少洲君は、その分量が膨大であることを懸念して、文集を私に授けた。(そこで私は) その中でもとりわけ學問に関係あるもの若干篇を選んで、会稽郡の官吏である莊陽山に依頼し、版木に彫ることで(広く) 伝えようとした。そんな折(歐陽南野の) 門人の宗伯・李石麓君のほうでも編んだ文集を送ってきたので、そこで互につきあわせて編集してみると、あわせて文章若干篇を得たので、(全体を) 整えてみると四巻になった。

序を記して曰うには、天地・万物に通じているのは一氣にほかならない。良知は、氣の靈明なるものである。天を生じ、地を生じ、万物を生じるときに、(そこに) 靈氣が貫いていないことはない。このことをこそ「生生の易」と謂うのであり、これこそが千聖の学脈なのである。亡くなられた我が陽明先生は、世の儒者が沿襲してきた弊害を嘆き、はじめにこの宗旨を掲げて天下を教化し、周濂溪・二程子に溯ることによって(その淵源たる) 孔子・孟子にまで達しようとしたが、(そ

れは)学脈がここにこそあるということをよくよくご存知であったからだろう。海内の同志の士のうち、見て知る者と聞いて知る者とを問わず、致良知の説があることを知らないものはいない。しかしながら卓越してみずから(具有する良知を)信じて、着実にみずからの良知を致すことができる者は、いったいどのくらいだろうか。超出して言葉による教えの外にみずから悟ることができる者は、いったいどのくらいだろうか。

良知には本来、知るといふ(作為をする)ことはない。知によつて知ることができたり、識によつて識することができるものはすべて、知識の知であつて良知ではない。良知には本来、知らないということはない。聞いてはじめて扱ひ従い、見てはじめて認識できるものはすべて、聞見の知であつて良知ではない。これらはすべて、みずからが具有する良知を自分で信じていることができずに、良知では天下の変化を尽くすことができないと疑つて、みずからの外に依拠するものがあるのである。道は本来、自然(自ずから然り)であつて、聖人が教えを設けたのは、いずれも道を補助する(二次的な)方法にすぎない。良知もただ方法(の一つ)である。本当にみずから悟ることができ、特定の方法に執着しなければ、知はそのまま良知の知であり、識はそのまま良知の識であり、聞見はそのまま良知の聞見なのであつて、もとより内外に分けられることなどないのだ。

南野さんは若い時分から、虔の地で先師に従学された。いわゆる見て知る者である。沈着で純粹、聡明であつて、その才識はもとより(陽明先生に)達するほどであり、(そうであればこそ)日頃、先師から囑望されていたのである。およそ(同門を)振るゝ導き鍛錬させるにあつては、どこまでも行き届いており、はつきりと体得し黙々と学問に励むことにはこの上なく努力し、そうして先師の志を受け継ぐにあつても、あらゆることに心配りをした。私は不肖ながら、交遊を南野さんに結んでいただくこと三十餘年にもなり、互いに切磋琢磨して利益を受けること、とりわけ深かった。師門晩年の

宗説について、(これを)とり上げて検証するたびに胸中さっぱりして快哉を叫び、そのたびごとに聞いたことがないものを聞けたと思わないことはなかった。(このことは)甘い酒を飲んだときのように、その感慨が顔に溢れんばかりであった。(これは)いわゆる交ごも相い益するということだろうか。

先師はかつて「独知には良でないものなどはない」と仰ったことがある。南野さんは志を同じくする者と学問を論じるたびに、独知の説を詳しく説きほぐすことが多かった。『大学』に言う「好色を好み、悪臭を悪む」とあるのは、その応感関係(が成立すること)の本当の機序であり、自分を欺くことを戒めてみずからを満足させることを求めるのは、つまり慎独である根柢なのであって、(南野の)文集中の文章にはこの意義でないものはない。いわゆる卓越した確信、超出した悟りということに近いものであろう。

儒臣が君を得るのは、古来難事とされてきたことである。昔、王通の学問は、彼自身には結実しなかったものの、貞観の時代に日の目を見たのは、房玄齡・杜如晦・王珪・魏徵ら諸賢が(王通を)顕彰することでもたらされたものだろう。先師の学問の場合には、王通のようであつただけではなかった。南野さん自身が聖哲な君にお仕えし、礼楽の教化を明らかにされたのは、房玄齡・杜如晦ら諸賢よりまさるものである。その実践した事柄についてみれば、ますます儒者の有用の学問の確信を深め、師門に誉れがあることに寄与している。惜しいことよ、天がいましばらくは承らえさせず、大いなる事業をついに世に明らかにさせなかつたことは。我々にとつては悔やみきれないことである。この文集を読む人が、参考にできることを理解し、信じ悟り、(それを)みずから反省して体得すれば、この学問を永遠に明らかにすることになり、(このようにしてはじめて)そのはたらきはおのずととどめようがなくなるのである。

【語釈】

① 歐陽南野：歐陽徳（二四九六～一五五四）のこと。王守仁の弟子。字は崇一、号は南野、諡は文莊。江西泰和県の人。嘉靖二（一五二三）年の進士。官は礼部尚書に至る。欧陽徳は若くして郷試に合格したことから、王守仁は彼を「小秀才」と呼んで、目をかけた（『王文成公全書』「年譜 嘉靖五年四月条」。また、守仁は来学者に対して「まずは崇一と論じてみよう」と言っていたという（韞豹「南野歐陽公墓誌銘」）。欧陽徳の文集で刊行が最も早いのは、嘉靖三十七（一五五八）年刊『歐陽南野先生文集』三十巻本である。王畿の手に成る本序文は、『歐陽南野先生文集』四巻本のために記され、後掲する原序には「嘉靖甲子」（四十三／一五六四年）の紀年がある。

② 門人督學少洲馮君：馮惟訥（？～？）のこと。字は汝言、号は少洲。山東臨朐県の人。「督学」は、地方の教育行政を監督する官のこと。「提学官」とも呼ばれ、地方行政を担う按察司の副使・僉事、都察院の監察御史（南直隸）がその職に当たった。主な職務は、地方の学校への入学、学校に在学する生員の成績考査などである。余繼登の手に成る「光祿寺卿馮公惟訥墓志」によれば、馮は何度か督学となっているが、王畿の本序文が記された嘉靖甲子（四十三年）以前には、その前年の癸亥の年に山西右参政に陞り、同省の按察使となったことを記すだけで、督学のことには記されない。あるいは同「墓志」には、馮が壬戌（四十一年）に浙江提学副使となったことが記されており、このときのことを指すか。なお馮惟訥は、前出の『歐陽南野先生文集』三十巻本や『歐陽南野先生文選』五巻本（隆慶三年）など、欧陽徳のほかの文集の編纂にも関わっている。

③ 陽山莊尹：莊国禎（一五二七～一六〇四）のこと。字は君祉、号は陽山。福建晋江の人。嘉靖四十一（一五六二）年の進士。

④ 宗伯石麓李君：李春芳（一五一〇～一五八四）のこと。字は子実、号は石麓。興化（現在の江蘇省興化市）の人で、嘉靖二

十六（二五四七）年の進士。翰林学士・礼部尚書を経て隆慶のはじめに内閣首輔となり、この後吏部尚書に至る。『明史』卷一九三に伝がある。「宗伯」は『周礼』に典拠を持つ語で、礼部尚書を指す。李春芳が欧陽徳の弟子であったことに
ついては、李春芳の文集である『李文定公貽安堂集』卷九「敕建文莊歐陽公祠堂碑」に、

壬辰、銓郎林子春偕予謁公京邸。是年、擢南司業。予與吉安守袁子株、同往受學金陵。是時、門下士紛集如雲、公獨
顧予二人、厚以爲可教。蓋屬意者惓惓焉。

とある。

⑤序曰：この「序」とは、『歐陽南野先生文集』四卷本に草した本序文を指す。

⑥良知、氣之靈也。生天生地生萬物、靈氣無乎不貫：良知が、一身の「靈氣」として、万物と関わりの中で一体であるこ
とを言うもの。「東遊問答」（『龍溪會語』卷三）に、「龍溪曰、『仁統四端、知亦統四端。良知是人身靈氣、醫家以手足痿
痺爲不仁、蓋言靈氣有所不貫也』」とあり、また「太平杜氏重修家譜序」（『全集』卷十三）に、「良知者天地之靈氣、原與
萬物同體。手足痿痺爲不仁、蓋言靈氣有所不貫也」とある。

「生天生地生萬物」は『伝習録』下卷に、「先生曰、『良知是造化的精靈、這些精靈、生天生地、成鬼成帝、皆從此出、
眞是與物無對。人若復得他、完完全全、無少虧欠、自不覺手舞足蹈、不知天地間更有何樂可代』」とある。王畿の言葉
としては、『龍溪會語』卷二「答吳悟齋掌科書」に、「良知不假學慮、生天生地生萬物、不容自己之生機」とあり、また
同卷五「南遊會紀」に、「天地生物之心、以其全付之於人。而知也者、人心之覺而爲靈者也。從古以來、生天生地、生
人生物、皆此一靈而已」とある。

⑦生生之易：『易經』繫辭上伝に「生生之謂易」とあるのにもとづく。

⑧濂洛：「濂」は周惇頤の号「濂溪」を指し、「洛」は程顥・程頤兄弟を指す。周惇頤を「濂」と表現するのは、周敦頤が晩年に廬山の麓に濂溪書堂を構えたことにより、程顥・程頤を「洛」と表現するのは、程兄弟が洛陽出身であることによる。

⑨鄒魯：「鄒」は山東省鄒県のことで孟子の故郷を指し、「魯」は春秋戦国時代に存在した国で現在の山東省にあたる。

孔子の故郷を指す。「鄒魯」は、ここでは前の「濂洛」とあわせて、宋学以来正統と考えられてきた儒学の系譜を指す。

⑩見而知之與聞而知之：『孟子』盡心下篇。

孟子曰、由堯舜至於湯、五百有餘歲。若禹・皋陶、則見而知之、若湯、則聞而知之。由湯至於文王、五百有餘歲。若伊尹・萊朱、則見而知之、若文王、則聞而知之。由文王至於孔子、五百有餘歲。若太公望・散宜生、則見而知之、若孔子、則聞而知之。由孔子而來至於今、百有餘歲。去聖人之世、若此其未遠也、近聖人之居、若此其甚也。然而無有乎爾、則亦無有乎爾。

⑪言教之外：仏教語で、如来が言葉を使って教えを示すこと（『漢語大詞典』）。

⑫良知本無知く聞見之知而非良知也：王畿は、「知」は本来一つであるが、本来的なありかたとしての「良知」と、非本来的な「知」のありかたである「知識」という二者が現出することについて、いたるところで言及している。いま、良知と知識に対する王畿の考えを「致知議略」に見れば次の通りである。

夫良知之與知識、差若毫釐、究實千里。同一知也、如是則為良、如是則為識、如是則為德性之知、如是則為見聞之知、不可以不早辨也。良知者、本心之明、不由學慮而得、先天之學也。知識則不能自信其心、未免假於多學億中之助、而已入於後天矣。良知即是未發之中、即是發而中節之和、此是千聖斬關第一義、所謂無前後内外、渾然一體者也。

序文の当該部分については次のように理解した。前半の「良知本無知く知識之知而非良知也」は、「良知」は本来的に知ろうという作為をとまわらないがゆえに、「知」や「識」という主体の分別意識によって認知されたものは、本来的な「良知」ではなく「知識」という分別による「知」のことを言うもの。後半の「良知本無知く聞見之知而非良知也」は、「良知」は本来的に全てのことを直に把握する能力であるがゆえに、「聞」「見」という後天的な知覚によって認知されたものは、本来的な「良知」ではなく「聞見」による「知」のことを言うもの。

なお、序文当該部分中の「可以知知、可以識識」という表現は、古くは梁の蕭統「令旨解法身義并問答」に、「法身虚寂、遠離有無之境、獨脱因果之外、不可以知知、不可以識識」とある。この「不可以知知、不可以識識」という表現は、後に多く道教文献において用いられる。たとえば、南宋・林自然の『長生指要篇』には、「竊聞先天大道、在混沌之中、不可以識識、不可以知知」とあり、また元の『黄帝陰符經心法』中の「聖人以期其聖、我以不期其聖」に対する胥元一注に、「夫道不可以知知、不可以識識、其可多知博識、而會乎其忘物遺人豁然自得者為然乎」とある。いずれも、絶対・超越的な形而上的本体が、人の認識では捉えることができないことを言うものと理解した。

⑬南野子蚤歲即從先師於虔：一五一六年に贛州（江西省）で講学していた王守仁に歐陽徳が会い、從学したことを指す。「虔」は、隋から南宋にかけての贛州の呼称。

⑭授記：仏教の用語。仏が未来に仏の悟りを得ると予言すること、または未来の成仏の保証を与えることを意味する（『仏教語大辞典』）。仏伝文学「燃灯仏授記」において、釈尊の過去世の前身（スメーダ）が、燃灯仏（ディーパンカラフツダ）によって覚者になることを予言され、また保証された逸話が有名である（竹村牧男『インド仏教の歴史』）。当該序文の文脈、および語釈①に記した王守仁の言葉から、歐陽徳が将来大成することを王守仁が期待していたことを読み取れる。

⑮振靡淬鍊：「振靡」は、「靡」が「誘」に通じ、振るい誘うの意。「淬鍊」は磨鍊に同じく、鍛え磨くこと（『漢語大詞典』）。以上を踏まえて文献上に類似の表現を探してみると、『論衡』率性篇に、

孔門弟子七十之徒、皆任卿相之用、被服聖教、文才雕琢、知能十倍、教訓之功而漸漬之力也。未入孔子之門時、閭巷常庸無奇。其尤甚不率者、唯子路也。世稱子路無恆之庸人、未入孔門時、戴雞佩豚、勇猛無禮、聞誦讀之聲、搖雞奮豚、揚脣吻之音、聒賢聖之耳、惡至甚矣。孔子引而教之、漸漬磨礪、闡導靡進、猛氣消損、驕節屈折、卒能政事、序在四科。

とある。

⑯若飲醇醴、盎然且溢於面：「醇醴」は甘い酒の意味。嵇康「養生論」に「勁刷理鬢、醇醴發顔」とある。「醇醴」と「盎然」とが表現上関連することについては、蘇軾の「答李邦直」詩に「詩詞如醇酒、盎然薰四支」とあり、また方孝孺の「喜友堂銘」詩にも、「飲此醇醴、盎然春溫」とある。これらの用例を踏まえると、「盎然」とは、「醇醴」を飲むことによつて、精神的・身体的に満ち溢れる様子を描写する言葉と理解できる。

⑰所謂交相益者：「所謂」が具体的に何を指すかは不詳であり、あるいは成語を指すのかもしれない。「交相益」という表現は、たとえば『資治通鑑』卷二二九・唐紀四十五に、陸贄が徳宗に奉つた上奏文に次のようにある。

諫者多、表我之能好。諫者直、示我之能容。諫者之狂誣、明我之能恕。諫者之漏泄、彰我之能從。極言納諫之美、以誘掖其君。是則人君與諫者交相益之道也。諫者有爵賞之利、諫者得獻替之名、君亦得采納之名。然猶諫者有失中而君無不美、唯恐讜言之有不切、天下之不聞、如此則納諫之德光矣。

⑱先師嘗謂「獨知無有不良」：王守仁が「獨知無有不良」と述べた資料はみつからない。あるいは守仁が述べた似た趣旨

を、王畿が表現しなしたのか。なお、この言葉は王畿「致知議略」（『全集』巻八）および「政学合一説」（『全集』巻八）にも見える。

⑲多詳於獨知之説：「獨知」とは、『大学』誠意章の「所謂誠其意者、毋自欺也。如惡惡臭、如好好色、此之謂自謙。故君子必慎其獨也」、および『中庸』の「莫見乎隱、莫顯乎微、故君子慎其獨也」の各「獨」字に対する朱注に、「獨者、人所不知而已所獨知之地也」とあるのにもとづく。歐陽徳は、「獨知」を「良知」に重ね合わせて理解し重視していた。たとえば『歐陽南野先生文集』巻二「答楊方洲」の第一書に、「良知二字是千古精神命脈。聖人之學、莫要於慎獨。獨知也者、良知也。慎之也者、不欺其知、以致乎其至也」とある。また、歐陽徳の弟子であった王宗沐の「南野先生文選序」にも、「循循善誘、雖不出『中庸』之慎獨、『論語』之改過、流轉對治、量其人之力而後投之以其當」とあって、學習者は「獨」というみずからにしか覺知しえない場において修養に励むべきだと、歐陽徳が考えていたことが分かる。

⑳好好色惡惡臭：『大学』中の言葉。前注を参照。

㉑戒自欺以求自慊、即所以為慎獨也：前注を参照。

㉒所謂卓然之信、超然之悟：ここでの「所謂」は、おそらく「卓然」と「超然」のみを指す。『說苑』建本に、「塵埃之外、卓然獨立、超然絕世、此上聖之所遊神也」とある。

㉓河汾之學：隋の王通（五八六～六一七）の學問を指す。王通、字は仲淹、絳州龍門（現在の山西省）の人。隋の文帝に「太平策」を上奏したものの採用されず、以後は郷里の河汾（山西省を流れる黄河とその支流である汾水との間）で著述と講學に専念した。王通の言行をまとめたものに『中說』十卷がある。

㉔貞觀之朝：唐の二代皇帝・太宗治世下（六二六～六四九）において、理想的な政治が行なわれた年代を指す。

②5房・杜・王・魏諸賢：房は房玄齡（五七八～六四八）、杜は杜如晦（五八五～六三〇）、王は王珪（五七一～六三九）、魏は魏徵（五八〇～六四三）を指す。いずれも唐王朝建国の功臣である。ここで挙げられている功臣は、『中説』の序に「若房・杜・李・魏・二溫・王・陳輩、迭爲將相、實永三百年之業、斯門人之功過半矣」とあるように、王通の門人と考えられていた人々である。また『中説』には、ここに挙げられる全員が王通に教えを受ける描写が見られる。

②6先師之學、不啻河汾、南野子身際明聖、宣昭禮樂之化：前半の二句は、王通の學問がその在世中は世に顕れず、その學問は彼の弟子達の功績によって明らかになったという前文を承けたうえで、王守仁の學問はそうではなかった、つまり守仁在世中からその學問は世に顕れていたことを言うものか。後半の二句は、おそらく歐陽徳が礼部尚書として仕えたことを指す。

②7與有光焉：おそらく成語の類であろう。

②8天不慙遺：『詩經』小雅・十月之交に「不慙遺一老、俾守我王」とあり、『春秋左氏伝』哀公十六年の伝文に「夏、四月、己丑、孔丘卒。公誄之曰、『旻天不吊、不慙遺一老、俾屏余一人以在位（杜預注：慙、且也）』」とある。また、『河南程氏文集』卷十一「明道先生墓表」にも「天不慙遺、哲人早世」とある。

【参考資料】

【校勘】において記したように、『龍溪王先生全集』所収の序文と『歐陽南野先生文集』四卷本原序とでは、文字の違いのほか、句や文章単位での大きな出入がある。そこで、そのような大きな出入はゴチック体で示して、原序全文を左に参考資料として掲出する。

『歐陽南野先生文集』四卷本原序

歐陽南野子文集行於世久矣。門人督學少洲馮君慮其浩博，授集于予，選其尤有關於學者若干篇，謀諸會稽尹陽山莊君，將梓以傳，而門人宗伯石麓李君亦以所選集寄至，遂參互校輯，共得文二百一十篇，釐爲四卷而屬余序之。

曰：通天地萬物一氣耳。良知、氣之靈也。生天生地生萬物，而靈氣無乎不貫，是謂生生之易，天地萬物一體之仁也。孔門之學，惟務求仁，以天地萬物爲一體仁者，覺而已。醫家以瘕痺爲不仁者，言不覺也。故曰「吾有知乎哉。無知也」。蓋有不知而作，我無是也。言良知本來具足，無知而無不知也。此學脈也。顏氏如愚，故能默識，以發聖蘊。至孟軻氏指示不學不慮之旨而義始明備。濂溪之明通公溥，明道之明覺自然，其幾矣。良知者，聖絕學也。我陽明先師生於絕學之後，慨世儒相沿之弊，首揭斯旨以覺天下，將溯濂洛以達於鄒魯，蓋深知學脈之有在於是也。海內同志之士，見而知之與聞而知之者，莫不知有致良知之說。然能卓然自信，實致其知者有幾。能超然自悟於言教之外者有幾。是未可知也。

良知本無知，凡可以知，知可以識，識是知識之知而非良知也。良知本無不知，凡待聞而擇之從之，待見而識之，是聞見之知而非良知也。是皆不能自信其良知，疑其不足以盡天下之變，而有所待於外也。道不言而顯，聖人立教，皆助道法耳。良知亦法也。果能自悟，不滯於法，知即良知之知，識即良知之識，聞見即良知之聞見，原未嘗有內外之分。良知不由知見而有，而知見即良知之用，渾然一體，澄然兩忘。舍此亦無良知之可致也。良知即『易』變動周流，天地萬物之生機，纒泥聞見知識，不復可以適變，其言微矣。顏子之默識，睿而爲愚者也。子貢·子張之徒，不能自信，必假於知識聞見以助益之。依倣測億，良知反爲所蔽，千百年。相沿之習，亦居乎可見矣。

南野子蚤歲即從先師於虔，所謂見而知之者也。沉粹敏慧，才足以達先師，素所授記。凡振闢淬鍊，蓋無所不至，而其顯體默究，孳孳疊疊，以承藉之者，亦無所不用其情。蓋師門之冠也。予不肖辱交於南野子三十餘年，受益最深。師門晚年宗說，

每舉相證、未嘗不爽然稱快、以爲聞所未聞、若飲醇醴、盎然且溢於面、所謂交相益者非耶。

先師嘗謂「獨知無有不良」。南野子每與同志論學、多詳於獨知之說。好好色惡惡臭、乃其應感之真機、戒自欺以求自嫌、即所以慎之之功也。良知不學。學者復其不學之體而已。良知不慮。慮者復其不慮之體而已。非有所加也。其穀觶見於堂下之牛、其怵惕即隱見於入井之孺子、其不受不脣見於行路乞人之嘍蹶、真機所發、神感神應、豈一毫有假於外而後然哉。所謂一體之學與。卓然之信、超然之悟、蓋庶幾無愧焉。集中無非斯義。此其大畧也。

儒臣得君、自古爲難。昔者河汾之學、不行於身而見貞觀之朝、蓋房·杜·王·魏諸賢爲之表章、有以致之也。先師之學、不啻河汾、南野子身際聖朝、宣昭禮樂之化、過於房·杜諸賢。即其所履、益信儒者有用之學、於師門與有光焉。予不肖、已分無補於世、石麓諸君、敦行懋學、津津柄用、以繼其志。固所謂聞而知之者也。後之讀是集者、知所考鏡、從信入悟、反求而自得之、所以官天地、煦萬物、生生之機、不容自己、聖學庶將有賴焉耳。嘉靖甲子、夏五月吉。友人龍溪王畿譔。